



# 町民文芸

## 只見短歌会

七月詠草

大塚栄一

指導

あと何年かく健やかに動けるか畑は私の生き甲斐の場所

馬場 八智

西日本豪雨被災地の痛ましさをテレビに見つつわが町思ふ

関谷登美子

連日の猛暑に萎え行く野菜類雨待ち焦がれ空を見上げぬ

渡部ゆき子

偶然に知恵の輪外れふたびを試せどその夜は遂に外せず

新国由紀子

頂垂るる如く下向くあじさいの花期移らふはただに惜しまる

目黒 富子

玄関先の赤く実りしトマト採り今年はどうかと皆で楽しむ

飯島小百合

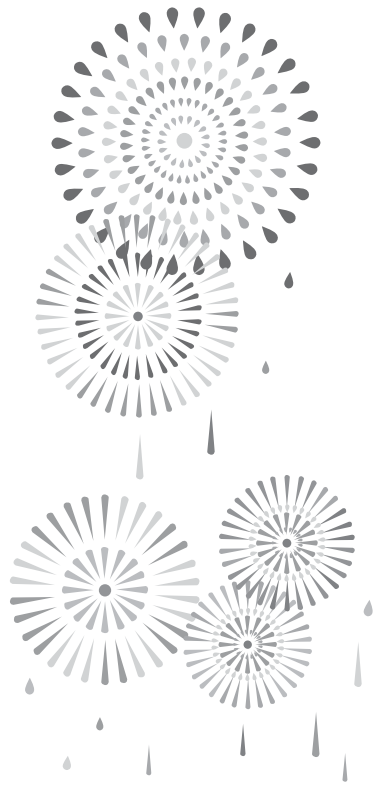
この夏の異常気象に畑作は水の不足に枯れ苗多し

渡部ヨリ子

こぶし苑ショートステイに來しわれにスタッフらみな明るく優し

新国 洋子

(出詠順)



## 只見俳句会

八月例会

目黒十一

指導

履き心地よきサンダルや朝曇

恒 夫

手に鍬の少年の日や敗戦日

礼

開け放す居間にも届く夕焼雲

礼

夏霧の雲わくごとく只見川

一 穂

サンダルに朝露の付く盆の道

一 穂

ニンジンの間引きを急ぐ妻の声

修 一

初婚や朝採りキウリかぶりつく

修 一

東京の五輪見るとや生身魂

吉 児

同級も戦友も無し虫を聴く

吉 児

鯉の喉如何にと覗く大旱

幸 生

月の雫とどめ青田に蜘蛛の糸

信

寝転びて高校野球夏の午後

信

夏大根勝手気ままに太り出す

都

父と子の手と目の早さ岩魚取る

味代子

夕立や机上の手紙ふと暗く

味代子

万緑の幟が客を待っている

味代子

